

言葉と文学の記号論

——貪欲なりアリズム理論のために——

はじめに

最近、「解体」とか「脱構築」(deconstruct, deconstruction)という用語がしばしば聞かれるようになった。既成の枠組や体系を一度崩してみて、そこにあったものの意味を新しい目で見直し、新しい枠組や意味を創造すること程の意味で用いられているようであるが、ときどき後半部分の作業がなおざりにされ、「破壊」(Destruction)や「分解」(dissolution)の印象を与えていることもある。これには、これ等の用語を作り出した理論が深く係わりあっているように思われる。本稿では、ここに問題とするような近年の言語理論・文学理論を批判的

滝 沢 正 彦

に概観し、若干の疑問を提出し、更に、開かれた「構築理論」の可能性を吟味してみようとするものである。

私は以前、それぞれ執筆の時点での文学理論への疑問と提案を含む小論を二度発表したが、本稿は、それ以後の理論の展開をも視野に入れて整理し直したものである。しかし、基本的には、先の二論文を踏襲するものであって、私の提案にも大きな変化はない。したがって、部分的にはこれらと重複するところがあることをお断りしておかなければならない。また、本稿の題を「記号論としての言語・文学理論」とはしないで、「言葉と文学の記号論」としたのは、現在の記号論への批判を込めたものであって、狭い意味での「記号論」から、言語学と文学

理論を救い出したいからである。このことの意味は、以下の論の中で明らかにして行きたい。

一 言語学から記号論へ

十九世紀末頃までの言語学 (Philology) は、訓詁注釈等の文学研究(1)を含んでいた。十九世紀には、印欧諸語間の音の対応から言語の系統を調べる比較言語学が急速に発展し、言語学は専門的な科学としての色彩を濃くして行ったが、それでも、言語学を表わす語としては philology が用いられた。(2)

今世紀に入り、ソシュールの『一般言語学講義』(Ferdinand de Saussure, *Cours de Linguistique générale*, 1914) が著者の没後その弟子達によって出版され、直接間接にその影響を受けた人々(3)によって構造言語学 (Structural Linguistics) が成立するに及んで、Linguistics という語が言語学を示す言葉として多用されるようになった。(4) この構造言語学の中から今日の変形生成文法 (<<Transformational>> Generative Grammar) が来て来た。(5)

ソシュールの功績は多方面に及ぶが、記号論との関係

では、次の三点に要約される。

(一) 言語学を、言語の歴史的变化の面を研究する通時言語学と、ある比較的短い時期の言語の体系を研究する共時言語学に分けたこと。前者は既に可成り専門的・科学的に行なわれていた比較言語学、とり分けドイツの青年文法学派と呼ばれた人々のゲルマン語の共通基語 (祖語) の研究を念頭に置いていたと思われるので、ソシュールの意図はともかく、ソシュール以後は後者、すなわち、共時言語の研究に力が注がれることになった。ソシュールに従えば、この二つの言語研究を統一する「総合言語学」は存在しないのであるから、言語学者は、歴史的な力を拒否して、特定の時期の (多くの場合現代の) 言語の体系化 (法則の発見) に向うこととなった。私見であるが、これには、アカデミーを作って言語を中央統制し、言語の地域差・変化を拒否しようとする、フランス語のイデオロギーがその背後にあったと思われる。

(二) 言語を構成する各要素 (一つ一つの音や単語) は、単独では意味を構成しないで、体系の中にあってはじめて、他の要素との関係の中でのみ有意義となること。ソシュールは、有名な将棋の比喩でこのことを説明してい

る。将棋盤の外に転がっている駒は無意味であるが、これが約束に従った仕方では盤上に並べられると、盤上の他の駒との関係の中でそれぞれの駒が個々の意味を持つように、音声や語は、他の音声や語との関連の中ではじめて言語としての意味を持つと言われる。そして、このことの系として、音声や語は他の音声や語との関係として意味を持つのであるから、他の音声や語との違い(差異とも異差とも言われる)によって意味を持つ、とも言える。(同一のものの中には差異がないので、関係も成立しない。)こうして、ソシュール以後の一部の人々の愛用する言い方に従えば、言語は、異差の体系と言い代えることもできる。

(三) 言語を含め、一般に記号は何かを「意味するもの」(signifiant)であるが、丁度一枚の紙の表と裏のように、意味または「意味されるもの」(signifié)と結びついている。それぞれ、「意味するもの」「意味されるもの」と訳されているが、ときには「能記」「所記」とも訳される。後者は、しばしば対象世界、たとえば、「犬」という語の場合は、現実には動いている具体的なあれこれの犬(物体としての犬)と誤解され易いが、言語の意味

(されるもの)は、概念であり、具体的な様々な犬から抽象されたものである。この概念と「意味するもの(能記)」との「統一」あるいは「単位」を単語と考えて良いだらう。意味するものの差異(たとえば nap と han の [p] と [n] の音の違い)が意味されるものの差異(たとえば「凶」と「人」というそれぞれの「概念」を生み出す。

以上、誤解を怖れず要約したソシュールの言語理論から、今日の記号論への道は、様々な理論や思想が絡みあい、輻輳しているために、ここに素描することはとうていできない。ロシアの、通称「フォルマリズム」と呼ばれる運動、大陸の「構造主義」、フランスの「サンボリスム」、英米の「モダニズム」、とり分け「意識の流れ」の理論、フロイドの「深層心理学」やその影響下に生れた「原型理論」等々、記号論に至る道筋に直接・間接影響した知的な活動は、何れ整理される必要はあるが、本論の範囲には収りきらない。

ここでは、以下の論考との関係で、一つだけ、普通「サピアウォーフの仮説」と呼ばれるものに触れておきたい。明示的に言われることは少ないが、この考え方が

「記号論」を謂わば離陸させることにあずかつて大きかったのではないかと、私には思われるからである。「サピアリウォーフの仮説」を簡単に要約すれば、「言語のちがいが、人びとのものの見方、考え方、さらにまた行動の仕方や態度に決定的に影響している」とする考え方である。しばしば、「言語が文化を決定する」と短絡的に理解されることもあるが、サピアもウォーフも、いまま少し動的に言語を考えていたようである。ウォーフ自身「われわれは母国語によってひかれた線にそって自然を分析している」とは言っているが、そのすぐ後で「われわれは自然を分割し、概念に組織化する。そしてそうしながら、それぞれの概念に意味を付与するのである」とも言っているからだ。彼の主張は、あくまでも、言語は文化に大きな影響を与えるということであった。しかし、これが、言語が文化を決定すると読み換えられたとき、言語研究は弾みを与えられた。それは丁度、かつてマルクスの思想が「土台は上部構造を決定する」と読み換えられたときに似ている。人間の精神活動という厄介なものを手手にしようとするとき、今少し具体的で手懸りの確かなもので代用しようとする。今度は、経済ではなく

て言語という訳である。

勿論、言語は文化の重要な部分を占めるし、大きな影響を与えていることは誰も否定しない。問題は、前者が後者を決定すると考えるイデオロギーである。この考えは、文化の研究にとってマイナスであるだけではなく、言語研究そのものをもいびつなものにする。完結した言語(＝記号)体系の法則を追究しようとする姿勢は、他領域(他言語、方言、時代差、文化、自然)からの侵略を拒否しようとするため、生きた変化の過程としての言語ではなく、官製「標準語」を研究対象としがちであるからである。アメリカとフランスという、それぞれの意味で「標準語」統制の強い地域で記号論が発展したのは、理由がない訳ではない。

二 記号系から解体へ

先に述べたソシュールの三点を一言にまとめるなら、「言語は、意味を産出する差異の体系である」ということとなる。この場合の「言語」とは、ソシュールの言葉に従えば、共時言語であって、時間の中で絶えず変化しているものと考えた場合の言語のことではない。ある限

られた時間の中で、歴史的な変化を捨象した場合の「言語」のことである。また、ここで言う「意味」は、「意味されるもの」の「所記」、すなわち概念であって、具体的な「もの」、すなわち対象そのものではない。従って、「言語は対象を「模写する」(abbilden)とする素朴实在論は拒けられる。対象と言語との関係は、ソシュールでは極めて微妙に、従って曖昧に表現されているが、構造言語学以降の多くの人々によっては、潔く切り離される。論理的に対象世界の存在を否定することはできないが、多くの場合、その存在は無視される。何故なら、「言語は差異の体系であり」、短絡されたサピア・ウォーフの仮説に従えば、「言語が文化「意識を決定する」のであるから、「意識は差異の体系である」ことになり、現実の対象世界は、文化「意識とは関係のない、文字通り別の世界のものであるからである。

このように考えられた「言語」を現実の対象世界から飛翔させ、現実と訣別させることになった契機に、ゲードルによってアウトラインが示され、ヒルベルトとベルナイスによって細部の証明がなされた、数学および(記号)論理学における不完全性定理がある。不完全性定理

は「もし体系が無矛盾ならば、その体系の無矛盾性を表明して、しかも、その体系内では証明できないある算術的な命題が存在する」ことを証明したものである。いま少し分り易く言えば、「無矛盾性の証明はその体系ではなされない⁽¹³⁾」ということである。

不完全定理を先の言語の定義に結びつければ、「言語は差異(「記号」)の体系であり、その無矛盾性は、その体系(「言語」)の内部では証明されない」ということになる。この無矛盾性を真実性と置き換えれば、言語を記号の体系とする見事な言語記号論が完成する。すなわち、「言語は自らの真実性を証明し得ぬ記号の体系である」となる。

全ての文化記号論や言語記号論が、このような完成された装いをしている訳ではない。しかし、記号論の原理を理窟だけで追究すれば、論理的にはそうならざるを得ない筈で、事実、デリダや、我が国では柄谷行人がそれに近い結論に達しているように思われる。たとえば柄谷は、「ユークリッドの欠陥は、直線や点にかんして実は知覚あるいは自然言語に依存していたことにある。非ユークリッド幾何学がもたらしたのは数学が実在や知覚に

依存しないという認識であり、一方で、それはより厳密な形式化への努力としてあらわれる」と述べ、対象（知覚）と分離された完成された記号の体系（形式化）を描き出し、「自己言及的 self-referential」な文についてド・マンやデリダを引用しつつ、その『形式主義』が不可避的にもつ『決定不可能性』について語る。そこから引き出される結論は、「オーブン・システムやオーブン・テキスト（ウンベルト・エーコ）なるものも、結局は閉ざされ」た「メビウスの帯」であって、「そこから出ようとする限りそこに内属せざるをえない⁽¹⁴⁾」ということである。

自己言及的というのは、「クレタ人曰く、クレタ人は嘘つきである」という古典的な命題によって知られている、述語が主語を含む命題のことであるが、柄谷の論を追えば、「この文章は偽である」という文の真偽に還元され、「これは花である」↓「これが花でないのは偽である」↓「Aは偽である」と読み代えることにより、一切の言語表現を包摂しうることになる⁽¹⁵⁾。

言語を、閉ざされた、「決定不可能」な、柄谷の用語に従えば「メビウスの帯」のような記号系と考える場合、

意味はどのようにして産み出されるか。必然的に、それは差異の関係性から生じてくる。そのためには、既製の、対象世界へのもたれかかり、先の引用に従えば「知覚」、これをまず系の中から排除する必要がある。その後、各記号間の関係性が浮び上るのであるが、その意味抽出の手段が「解体」とも「脱構築」とも呼ばれる方法である。文学作品に限定して一般的な解読作業を考えるなら、作品（テキスト）を有意義な記号単位に解体し、言語規則（コード）の認めうる限りの可能な構造を再構成することによって、記号間のハエラーキ、対立関係、依存関係、孤立と連結等々を明らかにする。こうして改めて、作品の可能な構造、作品の産出する意味に近づくことができる。

しかし、これだけのことであれば、かつて言われた構造主義批評とどれ程の違いがあるのだろうかという疑問が生じる。事実、実際にはほとんど区別がつけ難いと言う研究者もある⁽¹⁶⁾。この派の批評家は、理論が先行し、実際の文学作品の具体的批評に未だ大きな成果を上げていないこともあって、この解読の過程、細部に目の届いた新しい解釈に触れ難いが、大まかに言って、構造主義批

判にしばしば伺われた深層心理分析、民族学、政治・経済との接点を徹底的に排除する点にこの派の特徴があるように思われる。一昔前のアメリカの「新批評」においても、作者の伝記や時代・社会背景を文学批評の中に持ち込むことは拒否されたが、それは芸術としての文学の自立、一種の「芸術至上主義」からの拒否であった。記号論に徹底した解体批評の場合、言語を、出口のない完結した記号系とするところからの拒否であるので、それは、イデオロギー（芸術至上主義を採るか否か）を越えた、一種の、動かし難い「真理」の様相をおびる。これは、「新批評」より、はるかに理論的に精密に見える。はたしてそうであらうか。⁽¹⁷⁾

三 言語体系と外の世界

二つの立場からの反論がある。言語の本質に関係する部分と、認識論に関するものであり、二つは結局は一つの源から発するが、先ず言語の問題から考えてみたい。

「言語は差異（≡記号）の（体）系である」と定義された。ここで、差異（≡記号）と、（体）系の二つが吟味される必要がある。

周知のように、万葉時代以前、「神^{カミ}」と「上^{ウヘ}」は異った母音であったようであるが、その後意味の違いを残して、音声上の差異が消滅した。このような例は無数にある。know, no; knows, nose; knew, new と同音異義語が羅列されるもかわらず、古英語の [kn] の k 音は現代英語に於て全て消失した。かくして knead, need; knight, night; kneel, Niel; knot, not 等は全て音声上の差異を失ってしまった。このことは、「意味するもの」の異差が「意味されるもの」の異差を産み出しているとは必ずしも言えないことを示していないだろうか。数量的に計量してみれば⁽¹⁸⁾このことは明らかであるし、歴史的にも、音声推移は「意味されるもの」の体系とは相対的に独自に起っている。仮りに、その意味における歴史性を排除するとしても、結果として、たとえば現代英語が同音異義語で溢れていることは、記号系として、英語は「劣った」言語であることを意味することになるのである。

二つの反論が予想される。一つは、文法（コード）やテキスト全体の中では異差が明示されるとする立場である。同音異義語も、コン・テキストの中では示差的であ

るとする立場であり、古くはイエスベルスンが know, igo が実際の発話の中で誤解されることがないとして(19)の立場と同じである。しかし、事柄はそれほど単純ではない。文法上の異差がないからこそ、たとえば Empson, *Seven Types of Ambiguities*, 1930 のような名著が生れたのであり、たとえば、He called me a fool. が、「私を馬鹿と呼んだ」のか「私に道化師を呼んでくれた」のかは、テキスト中の「意味するもの」の異差によるのではない。

第二の反論は、主としてフランス語圏で有力な、「書かれた」テキストを批評対象に限定しようとする立場であろう。英語以上におびたらしい同音異義語ないし同音異形を持ってゐるフランス語では、アカデミーによって厳密な綴り字法の区別が強制されており、たとえば *est* は *net* と書くことが「禁止」されているため、音上の差異はなくとも、「彼(それ)は……である」と「鳥」とは区別される。従って、コン・テキストの(たとえば文法上の)差異を考えるまでもなく、書かれたテキストの文字を調べるだけで、差異は明示的である。この立場からは、言語における「意味するもの」は音声で

はなく第一義的には文字(綴り字)である。(20)

この理論は、アカデミーの解体と共に消滅せざるをえない運命にあるが、現在でも、具体的にどのような一般(従って普遍的)記号操作に従って、たとえば *not* 「(単)語」と *not* 「文字」の区別(その差異性の明示)をしようとするのであろうか。もし、一部の文法家の主張するように、*not compose* (合成語)や *not illisible* (読みにくい文字)という記号同志の標準的結合規則に差異性の根拠を置くのならば、*not compose* 「合成文字」「山」の『人』、『仙』のような)の意味に用いたり *not illisible* 「読むにたえぬ単語」という意味で使ったりする、言語の創造性、比喻表現の可能性を排除しなければならなくなる。結局「意味するもの」に差異がなければ「意味されるもの」にも差異がないという強硬論に対しては、英語では、*cob* 「とうもろこしの穂」、*cob* 「馬の一種」、*cob* 「はしばみ」、*cob* 「石炭、碎石の山」、*cob* 「かもめの一様」、*cob* 「雄の白鳥」、*cob* 「壁用の土」、*cob* 「パンの一かたまり」が全て同一の「意味されるもの」となる悲しみを表現するだけで充分だろう。

結論を急ぐ前に、「(体)系である」という部分も少し

吟味しておかなければならない。仮りに、共時言語の法則を認めるとしても、その場合の法則は、「数学や論理学の法則のように、「間主観性 intersubjectivity」⁽²¹⁾になじまない」という点が先ず重要である。たとえば、「This is big.」と言う場合の 'is' は、論理学で言う copula (等号)ではなく、統覚 (Apperception: cogito || ~)であると私は思う)の表現であるということである。'is' は主体の表現であって cogitare (考える)でさえなく、あくまで cogito (私は考える)の表現である。もし、統覚の判断を除き、記号間でのみ有意義であるためには、big は bigger (than), biggest (of)であるべきであって、原級の big では、それ自体としては無意味である。この意味で、言語体系(法則性)は絶えず言語を運用しこれを支える人間 (Träger) の意識にさらされている。(但し、デカルトのように、統覚が先ず始めにあるのではなく、直接体験の分析の後に抽象されるものと考えることによって、観念論を回避出来る。)標準語や正書法が権力の恣意にさらされていることについては、既に言及の必要がないであろう。

最後に、厳密な意味での共時言語というものは存在し

えないものであることを指摘しておかなければならないだろう。

いかなる時代の言語も、常に変化の相の中で理解されなければならぬという意味で、言語は内時間 || 歴史的であると同時に、地域による相違を包み込んでいるという意味で、モザイク状の横の変化と異差を持っている。

これに、社会的・階級的な違いも加える必要があるかもしれない。しかも、これ等の三種の変化は互いに絡みあっている。中央対地方、新対古、支配对被支配は、しばしば区別し難く言語の中に浸透している。no と naw の音声上の差異 ([ou] と [ɔ:]) は、boat と bough における差異と同一であるにもかかわらず、後者のような「意味されるもの」の差異を産み出さない。no は中央・新・支配に対応し、naw は地方・古・被支配に対応する⁽²²⁾。

たとえば、中英語期、三人称複数の代名詩 E(①)は、北方系の they によって次第に取って代わられるが、標準語のなかったせいで、その変化の生じた時代や地方が、今日の我々にも比較的つまびらかに知ることができる。

実は、この種の変化が、今日現在の、謂ゆる「共時言

語」の中でも生じ続けているのである。たとえば「**o**」が、南イングランドでは「**oe**」に変化し、次第に北に伝えられて⁽²³⁾いる。これを隠蔽しているのが、正書法と「標準語」⁽²⁴⁾である。少し飛躍した言い方になるが、言われるところの共時言語なるものは、こうした事実を隠蔽するイデオロギーの産物なのである。還言すれば、「共時言語」とは、官製「標準語」のイデオロギー的表現のことである。

かくして、記号の系として言語を考える場合であつても、ここで言う記号の意味も、(体)系の意味も、数学や論理学で言う場合のそれ等の語の意味とは決定的に異なる。(数学に同音異義語はない!)したがって、ゲーデルの不完全性定理は、言語体系にはあてはまらないのである。簡単に言えば、言語は開かれた糸であつて、メビウスの帯ではないということである。勿論、言語の体系を包んでいる、それを概ね全体として(英語なら英語として)一つのものにまとめている、たとえば膜のようなものが存在することまでを否定しようとするものではない。しかし、その膜は、たとえて言えば細胞膜のように、細胞の外のものを(全く無秩序にはないが)取り入れ、

不要のものを送り出すことができるのである。数学や論理学のような、厳密な定義の下に立てられている系ではない。柄谷の比喻にしたがえば、言語はユークリッド幾何学的であつて、非ユークリッド幾何学的ではない。文字通り「知覚に依存」している。

「知覚に依存」していると言うことは、言語の外の世界(対象世界)を我々が認識することと深く関係しているということである。言語学と認識論も密接に関係している。⁽²⁵⁾したがって、外の世界が変れば、言語も変る。馬と鹿がほとんど同じ大きさであつた頃、「馬も四つ脚、鹿も四つ脚」と言えば、それはおそらくリアルな戦術的意味を帯びていただろう。今日それが比喩的意味なりこじつけなりに理解されるのは、記号論的意味の産出によつてではない。現実の馬が大きくなつたからである。

「雄弁は銀、沈黙は金」という諺は、銀本位制が放棄され、金本位制の採用とともに、「沈黙」の方を評価するものに変化した。「転石苔をもささず」は、動きの激しいアメリカでは立派なものたよとなつた。

外界は統覚を通して不断に言語の中に流入し、言語のコード(文法)を不断に改め、場合によっては破壊し、

再編成している。我々は又、そういう言語を用いて対象を切り取り、対象を認識（人間化）する。そういう弁証法的な相互の発展の過程として、言語と対象世界の関係が成立しているのである。

柄谷を含む一部の記号論者も、このことに気付いてはいるようである。たとえば、明治時代の日本文学の中で「結核」の持った個有的記号論的な意味について語りながら、「事実としての結核の蔓延とはべつに、蔓延したのは結核という『意味』にほかならなかった」と柄谷は書いている。柄谷に「結核」の記号論的「意味」を気付かせたのは、「事実としての結核の蔓延」と「意味としての結核の蔓延」との差異を通してである。柄谷は「事実」を認識しているのである。そして、その事実（「実際に社会的に蔓延している結核は悲惨なものである」）と『不如帰』に描かれている「結核」の違い、後者の「意味としての結核」を彼は論じることができるのである。もし、言語の系が閉じた系であり、自己の無矛盾性を証明できないメビウスの帯であり、この言語を通してのみ人間の意識が決定されるのであれば、柄谷はどうして、「意味としての結核」に辿りつけたであろうか。系

の内部には、「意味としての結核」だけが存在し、「事実としての結核」など知り得ない筈だからである。このことを承知の上で、ソシュール、ウォーフ、ゲーデルを用いて言語系を閉鎖するなら、それは明らかにイデオロギーとしての戦略的言語論でしかない。

四 おわりに

本稿は、言語もまた広い意味での記号であり、記号は場合によって人間の意識を離れて記号独自の意味を産出することを否定しようとするものではない。そうして作り出された「意味」が、我々の対象理解（認識）を曇らせ、場合によっては誤らせることのあるのも事実である。先の結核の例は必ずしも記号独自の意味産出によるものではないが、たとえば「ブタ」と言う音声学上の特徴が、象の近縁の哺乳類である豚をしばしば見誤まらせるのは、そうした現象の一つであろう。その限りで我われは言語記号に捕縛されている。この意味で近年の文化記号論の成果から、我われは多くのことを学んだ。しかし、我われが学んだのは、事実と乖離している「意味」についての詳しい考察であって、逆に言えば、我われをその捕縛

から解く方法を学んだのであった。少なくとも、それが「意味」であって、事実ではないことであつた。言ひかえれば、「意味」を対象化することを学んだのである。

解体批判の成果も、「意味」を取り出し、それを解体し、我々が細胞膜を通して吸収し再構築に資する材料を生産する限りにおいて有効な批評の道具であろう。解体という、ほとんど破壊的な作業によって、これまで氣付かれることのなかつた「意味」が暴き出され、我々の前に並べられる。たとえばフェミニストの解体批評が我われに与えた衝激は決して小さくなかつた。しかし、対象(物にしろ社会にしろ)との検証を通して再構成し、これを認識論に持ち込むことを「理論的」に拒否しようとする一群の記号論者に対して、彼等の言語「理論」が間違っていることを、理論的に明示しておかなければならないと私は思う。しかもこれを批判する場合、素朴実在論のような、今日ではイデオロギーと理解されている超越的な立場からではなく、彼等の「理論」にそくして行なわれなければならないと思う。本稿がいくらかでもそのことに役立てば幸いである。

(言い残したこと、とりわけ、二人称や一人称複数形

の論理構造については稿を改めたい。)

(1) 「言葉と信仰——二人称の構造をめぐって——」(『アガベ』十七号、一九七五年、一〇二二頁) および「文学理論としての読者論」(『一橋論叢』第八十三巻第四号、一九八〇年、五五―七二頁)

(2) ゲルマン語圏では文学全体を対象にしたが、フランスではギリシャ・ラテンの古典研究を意味することが多かったようである。何れの場合も、しばしば文献学と訳される。

(3) 構造言語学の成立には、他に、民族学から出版した Edward Sapir, *Language*, 1922 のような研究も大きな影響を与えてゐる。同年には、Otto Jespersen, *Languages, their Nature, Development and Origin* も出版されてゐるが、イエス・メルセンの「スリー・ランク」説には、今日から振り返ってみると、構造言語学のはしりを思わせる発想がある。Leonard Bloomfield, *Language*, 1933 が構造言語学に一時期を画した大著である。

(4) Linguistics という語は十九世紀中葉から、言語学者の意味での linguist という語はシェイクスピアの時代からあつたが、特別な主張を含んだ語ではなかつた。後者に関しては、OED は一八八二年以降廃語としていたが、一九七六年発行の『補遺』では一九二二年以後の例を挙げて「魔語」の指摘を取り消している。明らかに、philologist とは別の意味をも含めて新しく使用され始めた訳で、これは linguistics という語の多用と軌を同じくしている。

(5) Noam Chomsky, *Syntactic Structure*, 1957 を参照。

構造言語学は否定され、全く新しい言語学が誕生したとする人も多い。しかし、本稿の性格上詳論できないが、今日から振り返ってみて、生成文法が構造言語学から生れて来たことは明らかである。ここでは、両者に共通する共時言語体系へのこだわり、語の意味内容の文法体系への浸潤の拒否の二点を、さしあたり指摘しておく。

(6) 小林英夫の訳語。英語ではそれぞれ、signifier, signified と訳されてくる。

(7) フランス語の unite を、この場合、英語の unity と訳すか、unit と訳すかは議論のあるところであり、論争もある。

(8) 構造言語学以降、言語の体系上有意の差異を示す場合、/p/, /n/ 等の斜線で表記されることが多い。したがって、[ɔ] と [ɑ] は現代英語で対立しないので、一つの /ɔ/ に表記される。しかし、[ɪ] と [i] も対立しないのだが、この二つを一言（構造言語学では「音素」と呼ぶ）として、いる人は少数であるので、差異を強調する理論にも徹底していない部分があることが判る。

(9) 尾関周二『言語と人間』大日書店、一九八三年、一三七頁

(10) J. B. キャロル（詫摩武俊訳）『言語と思考』岩波書店、一九七二年、一七六頁より訳文を借用。B. L. Whorf, *Language, Thought, and Reality* [ed. by J. B.

Carroll], 1956, pp. 212—14

(11) 逆に、たとえばフーコーのように、文法の破壊に積極的な意味を見い出せるのもフランスならではであって、おびたしい方言や階級語が複雑に共存を許されている所（たとえば英国）では、あまり意味がない。

(12) 正確には、一九三一年に発表されたゲーデル『プリンキピア・マテマティカおよび類似の諸体系の形式的に決定不可能な命題について I』の第二の部分。竹内外史『ゲーデル』日本評論社、一九八六年、参照。

(13) 前掲書、三四頁及び一三頁。

(14) 柄谷行人「形式化の諸問題」（『現代思想』一九八一年九月号）、『隠喩としての建築』講談社、一九八三年、九九—一四、一二五頁より引用。デリダの龐大で難解な著作を整理して紹介することはここでは困難である。富山太佳夫は「デリダの発言のなかでおそらく最も異様な印象を残すものの一つは『テキストの外には何も無い』という明確すぎる断定である」と言い、「テキスト万能主義を、テキスト自律論を、デリダは否定する」として、R. Kearney, *Dialogues with Contemporary Continental Thinkers*, 1984, pp. 123—24 を引用している（『現代思想』一九八五年八月号、vol. 13—9、三八—九頁）が「デリダ自身の言葉（著者の意図！）にかかわらず、デリダの理論からは、自律したテキスト（言語の系・メビウスの帯）を外から動かす契機を引き出すことはできない。」「私の仕事をとらえて、あ

れは言語の彼方には何も無い、われわれは言語の内に幽閉されているという主張だと言いたる批評家にでくわす、ただただあきれますね。それと正反対の主張をしているわけですから(富山訳)というデリダの言葉を読むと、彼の議論の難解さは、理論の難解さではなく、理論の混乱の難解さだと思えてくる。彼の「理論」は、彼の「主張」を裏切っている。

(15) 柄谷自身が明示してそう言っているという意味ではない。彼の論を追って行けばそういうことになる、という意味である。

(16) Jonathan Culler, *On Deconstruction*, 1983, p. 30.

(17) 一九六〇年代以降の批判は多かれ少なかれ解体批評の影響を受けているものが多いが、フェミニスト批評とマルクス主義批評、読者論の三つは、ここでは外して考える必要がある。フェミニスト批評の中でも、たとえばエリマン(Mary Ellmann, *Thinking about Women*, 1968)等は、論理そのものを男性的なものとしてその解体に向おうとするが、この種の傾向を別とすれば、全体としてこれまで気づかれていなかったイデオロギー的偏向を照し出し、批評の普遍化に貢献していると思われる。これ等は何れも、ここで私の問題としている狭義の記号論とは別のものである。(18) たとえば、[æ]と[a] (a/)の震動数と波長の量的な差と、cat, outの意味の違いを論じることが、ほとんど無意味である。唯一考えられる象徴音の立場(たとえば

Hans Marchand, *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation*, 1960)も、言語系の外の要素を持ち込むものであって、記号論の容易に受け入れるものではなからう。

(19) Otto Jespersen, *op. cit.*, p. 286

(20) Cf Jacques Derrida, *De la Grammatologie*, 1967: tr. by G. C. Spivak, *Of Grammatology*, 1974

(21) 事柄の真偽ではなく、記号間の合法則性、正誤を、ばら対象とすること。不正確であるが、分り易く言えば、言葉と言う主体と、言葉の指し示す対象の両方を排除して成立する法則性。

(22) 拙稿「言葉と信仰」(前掲注1)参照。

(23) *haw* はしばしばアメリカの黒人の言葉に登場するが、*OH* の古い発音を残しているものである。

(24) 現在でもヨークシャー以北では [ou] の方が圧倒的に多い。

(25) ここでは、謂わゆる Queen's English のこと。英王室の公的場所での発音は現在でも [ou] である。

(26) 非常に興味深いことであるが、ゲーデルは後年、認識論に向ったようである。竹内外史、前掲書、一一八〜九頁。

(27) 『日本近代文学の起源』講談社、一九八〇年、一二三頁。

(28) 同書、一二三頁。(一橋大学教授)